

多摩川先人館

[先人No.10] 多摩川の自然に人間模様を描いた作家

国木田独歩 くにきだどっぽ (1871~1908)

「自然主義の先駆者」といわれる明治の作家、国木田独歩（くにきだどっぽ）。彼の代表作「武蔵野」には、多摩川中流部の武蔵野の風景が書かれています。



国木田独歩

出生の秘密

国木田独歩（本名・哲夫、幼名・亀吉）の出生は謎に包まれ、「出生の秘密」という言葉が定着する程異例のケースであったと言われています。

父は旧幡州龍野（現：兵庫県たつの市）の藩士・国木田専八、母は千葉県銚子の淡路まんとされていますが、これについても様々な説があり、真実はあきらかではありません。いずれにしても専八には、正妻・とくと三人の子供がいたため、まんとは独歩、専八の三人は別居生活をおくっていたようです。

腕白な少年時代

明治7(1874)年、専八は母が亡くなると、家族を龍野に残して単身上京しました。そして、銚子からまんとは独歩を呼び寄せ、御徒町の旧脇坂邸で生活を始めたのです。

元藩士の専八は、上京した翌年から東京裁判所勤務となり、2年後には新設された山口裁判所へ転勤になりました。まんとは6歳の独歩も、山口県吉敷郡山口町（現：山口県山口市）へ共に移住、そしてその直後、専八は正妻・とくと正式に離婚し、独歩は養子になったのです。

その後も専八は何度かの転勤を経て、明治11(1878)年、岩国裁判所勤務になり、一家も山口県岩国に移住しました。紅葉の美しさなどから「錦」のつく地名が多いこの岩国で、8歳から13歳までの少年時代を過ごした独歩は、成績優秀ながらも大変腕白なガキ大将であったと言われています。

15歳になると、県立山口中学校の初等科に合格、萩へ転勤となった家族と離れて寄宿舎へ入りました。夏冬の休暇には8里（約32km）あまりの道のりを歩いて萩へ帰省していて、この変化にとんだ道中の情景は、後に執筆された「画」に活写されています。

上京

明治20(1887)年、学制改革によって退学し、上京した独歩は現在の早稲田大学に当たる東京専門学校（現・早稲田大学）の英学部に入りました。

この頃であった二人の人物が後の独歩の人生に大きな影響を与えたのです。上京直後から機関誌を発行する「青年教会」に所属し、処女作「群書ニ渉レ」を発表、名も亀吉から哲夫へと改めた独歩は、麴町の一番町教会で洗礼を受けました。この時から独歩は、この教会の牧師・植村正久を基督者としてはもちろん、学識の高さなどにも影響され、慕うようになったのです。

一番町教会で洗礼を受けたのが、明治23(1890)年、独歩21歳の一月四日でした。その

数日後の18日、もう一人影響を強く受けた人物、徳富蘇峰と出会います。独歩はこの年の出来事を「明治廿にじゅう四年日記」に詳しく記しています。その日記によると、洗礼以来、日曜日には教会へ通い、熱心にキリスト教育の演説会などの手助け蘇するほか、学内誌の編集や、文集などへの執筆もしています。しかし、その頃、早稲田大学の校長に就任したばかりの名目上の校長・鳩山和夫への不信がつのり、ストライキを起こし、3月31日退学しました。独歩は四年にわたる東京での生活を送りましたが、5月1日、両親の住む、山口県熊毛郡麻郷おごう村（現・田布施町）へ帰郷しました。そして10月、吉田松陰を強く崇拜していた独歩は、田布施村（現・田布施町）の空き家になっていた分校で、「波多野英学塾」を開き、小学校の放課後、英語・数学などを教えていました。その後、明治25(1892)年に、弟・修二の進学にともない、再び東京の地を踏むまでの、田園風景は独歩の脳裏に不覚刻まれ、その後の著書の舞台として登場するのです。

信子との出会い

東京専門学校に在学中、亀吉から哲夫に改名し、女性雑誌に論説[*1]「アンビション（野望論）」を寄稿します。やがて教会に出入りを初め、植村正久[*2]を崇拝するようになり、キリスト信仰を深めていきました。この頃、学校内で学校改革と職務怠慢により校長排斥運動が起きます。独歩も運動に参加し、学校を退学しました。その後、大分県佐伯の鶴谷学館の教師をしていましたが1年つづかず退職。再び上京して、徳富蘇峰[*3]が設立した民友社[*4]に入社しました。

その後、海軍従軍記者として軍艦に乗船していた独歩は、佐々城本支、豊寿夫婦[*5]の従軍記者招待晚餐館に招かれました。これをきっかけに、佐々城家に出入りするようになり、しだいに長女・信子に惹かれていったのです。生活力のない独歩との結婚に、人々は反対しますが、2人はこれを押しきり結婚しました。しかし、数ヶ月後に信子が失踪、わずか半年程で離婚しました。

多摩川を書いた「武蔵野」

その後、独歩は渋谷村（現在の渋谷区）で弟・収二と暮らし始めました。明治29（1896）年9月から翌年4月まで渋谷村に住んでいた独歩はたびたび、多摩川中流部に広がっていた武蔵野[*6]の雑木林を訪れていて、日記「欺（あざむ）かざるの記」に記しました。独歩の代表作「武蔵野」は、この頃の記録をもとに、武蔵野の情景が書かれているとされています。その作品の中に、多摩川を描いた一節があります。

一 僕は曾（かつ）て斯（こ）ういふことが有る。実弟をつれて多摩川の方へ遠足したときに、一、二里行き、また半里行きて家並（やなみ）が有り、また家並に離れ、また家並に出て、人や動物に接し、また草木ばかりになる。此（ここ）変化のあるので 処々に生活を点綴（てんてつ）して居る趣味の面白いことを感じて話したことがあった。



「武蔵野」は、明治31（1898）年に発表された当時「今の武蔵野」という作品名でした。この年、榎本治と結婚した独歩は、翌年、報知新聞社へ入社。作家としては知名度は低く、「武蔵野」が注目されるのは、まだ先のことでした。

また、文集「武蔵野」の中の作品の1つ「忘れ得ぬ人々」の冒頭にも多摩川の二子周辺が書かれています。

「独歩社」を興す

独歩31歳の時に、矢野竜溪[*7]の経営する「敬業社[*8]」に招かれます。敬業社の出版部はやがて近事画報社として独立し、そこで独歩は多くの小説を発表した他、婦人画報の初代編集長として活躍しました。同じ頃、第二の文集「独歩集」も刊行、文壇の一部から注目をあびはじめたのです。

一時は好調だった近事画報社ですが、事業を拡大した事により、しだいに経営困難になっていきました。独歩は、負債をかかえてた事業を引き継ぎ、近事画報社の旧社員と会社を興します。

旧社員で始めた会社はまもなく、「独歩社」と社名が変わり、独歩が社長になりましたが、経営はうまくいかず、結局1年ほどで、破産してしまいました。

会社が破産してから、元々わずらわせていた結核が悪化していきます。病氣療養の為に湯河原で静養していた独歩は、そこでも小説の執筆を続けていましたが、さらに病状が悪化し、明治40（1907）年9月、茨城県湊町の知人の別荘に転居しました。

翌年2月、神奈川県茅ヶ崎南湖院に入院、4ヵ月後の6月、咯血がつづき死去しました。

年号	西暦	月.日	年齢	略歴
明治4	1871	8.30		旧幡州龍野（現在の兵庫県たつの市）藩士父・国木田専八、母・淡路まんの子として、千葉県銚子に誕生。本名、哲夫 幼名、亀吉。
明治7	1874		3	旧龍野藩主脇坂邸内に移住。
明治9	1876	2 5	5	家族で山口県吉敷郡山口町に移住。 専八の養子になる。
明治11	1878	9	8	弟・収二誕生。
明治18	1885	9	14	山口中学校に入学。
明治20	1887	3	16	山口中学校を退学し、上京。
明治21	1888	2 3 5	17	青年協会[*9]会員となる。 「青年思海」第八号に、処女作「群書二渉レ」を発表。 東京専門学校（後の早稲田大学）英語普通科に入学。
明治24	1891	3	20	東京専門学校を退学。
明治26	1893	10	22	大分県佐伯の鶴谷学館教師になる。
明治27	1894	7 9 10	23	鶴谷学館を退職。 民友社に入社。 日清戦争の従軍記者として軍艦千代田に乗船。
明治28	1895	3 9	24	呉（現在の広島県呉市）で退艦。 佐々城信子と結婚。
明治29	1896	4	25	信子と離婚。
明治31	1898	1.2 8	27	「今の武蔵野」（後に「武蔵野」と改題）を「国民之友」に発表。 榎本治と結婚。
明治32	1899	春	28	報知新聞社に入社。

		10		長女貞誕生。
明治33	1900	4	29	報知新聞社を退職。
明治34	1901	3	30	最初の文集『武蔵野』を民友社より刊行。
明治35	1902	1	31	長男虎雄誕生。
		12		敬業社（後の近事画報社）に入社。
明治37	1904	1	33	父・専八他界。
		6		次女みどり誕生。
明治38	1905	4	34	健康を害して銚子に滞在、静養する。
		7		第2の文集「独歩集」を近事画報社より刊行。
明治39	1906	3	35	第3の文集「運命」を佐久良書房より刊行。
		6		独歩社を興す。
明治40	1907	5	36	第4の文集「濤声」を彩雲閣から刊行。
		8		病気のため、転地療養を勧められる。
明治41	1908	2	37	神奈川県茅ヶ崎南湖院に入院。
		6.23		死去（満36歳10ヵ月）。

*1 論説（ろんせつ）

．．．物事の是非を論じたり解説したりすること。また、その文章。

*2 植村正久（うえむらまさひさ）

．．．プロテスタント牧師・神学者・評論家。富士見町教会・東京神学社を創立し、牧師の育成と神学研究に尽力した。

*3 徳富蘇峰（とくとみそほう）

．．．評論家。民友社を設立、「国民之友」「国民新聞」を発刊し平民主義を主張。

*4 民友社（みんゆうしゃ）

．．．徳富蘇峰が創立した出版社。雑誌「国民之友」を発刊、「国民新聞」を創刊。

*5 佐々城本支、豊寿夫婦

．．．佐々城本支は、日本橋の開業医。妻・豊寿は婦人運動家として知られていた。

*6 武蔵野（むさしの）

．．．東京都と埼玉県にまたがる洪積台地。雑木林のある独特の風景で知られた。

*7 矢野竜溪（やのりゅうけい）

．．．政治小説・随筆などで文名を上げた政治家・小説家。小説「経国美談」「浮城(うきしろ)物語」「新社会」など。

*8 敬業社

．．．神田区（現在の東京都千代田区）にあった教科書会社。

*9 青年協会（せいねんきょうかい）

．．．民友社の社員によって設立、学術研究を目的とした青年の団体。

（写真提供：「現代日本文学大系 国木田独歩・田山花袋集」筑摩書房）